

滋賀医科大学看護学科卒業生の動向 : 就業・進学状況とその意識を中心にして(資料)

その他の言語のタイトル	The trends among graduates of the Faculty of Nursing, Shiga University of Medical Science
著者	片岡 三佳, 流郷 千幸, 豊田 久美子, 田畑 良宏
雑誌名	滋賀医科大学看護学ジャーナル
巻	1
号	1
ページ	67-78
発行年	2003-02-15
URL	http://hdl.handle.net/10422/905

資料

滋賀医科大学看護学科卒業生の動向

就業・進学状況とその意識を中心にして

The Trends among Graduates of the Faculty of Nursing, Shiga University of Medical Science

片岡 三佳^{*1} Mika Kataoka, 流郷 千幸^{*2} Chiyuki Ryugou
豊田久美子^{*3} Kumiko Toyoda, 田畑 良宏^{*4} Yoshihiro Tabata

Abstract In order to investigate the educational effects in nursing school or faculty of nursing, we surveyed the present states in graduates of Shiga University of Medical Science by questionnaire methods and 136 graduates responded to this inquiry. Acquired results from this investigation were following; 1) Worked graduates in the field nursing or associated occupations were 86.8% of total (58.5% as nurse, 30.5% as community health nurse and 7.6% as midwives) and enrolled graduates to post graduate school were 14.1% of them. 2) More than eighty percents of them reported mental conflicts concerning their workplace. However, they generally satisfied with the "Human relationship in the workplace" and "Being able to have colleagues". Besides, for graduates, having job was source for growing themselves and economical independency. 3) Approximately six percents of graduates were in the process of post graduate school and some of them achieved their purpose. Sixty percents consider a necessary of enrollment to post graduate school.

抄 録 増加している看護系大学の教育活動を再考していくための基礎資料とすることを目的に、滋賀医科大学医学部看護学科卒業生を対象に、就業・進学状況とその意識に関する郵送法による質問紙調査を実施した。その結果、136名から回答が得られ、以下のことが明らかになった。1) 就業・進学状況：就業率は86.8%（内訳：看護師58.5%、保健師30.5%、助産師7.6%）、卒業直後の進学率は14.1%であった。2) 就業に対する意識：8割の卒業生が職場へのストレスを感じているものの、職場に対する満足度は、「人間関係」「仲間ができる」の項目において満足度が高かった。また、仕事をもつことを、「自分が成長する」「経済的に自立する」として捉えていた。3) 大学院進学に対する意識：大学院在学中・修了者は約6%で、6割の卒業生が大学院進学の必要性を感じていた。

キーワード The faculty of nursing, Trends among graduates, Conditions of current job and enrollment to post graduate school

看護系大学、卒業生動向、就業・進学状況

* 1 滋賀医科大学医学部看護学科 Shiga University of Medical Science, 連絡先：〒520 2129 滋賀県大津市瀬田月輪町 Tel: 077 548 2394, E-mail: mika3@belle.shiga-med.ac.jp

* 2 滋賀医科大学医学部看護学科

* 3 滋賀医科大学医学部看護学科

* 4 滋賀医科大学医学部看護学科

受付：2002年9月4日，受理：2002年12月11日

はじめに

国民の医療・ケアに対する関心とそれに伴う社会の要請を受け、1992（平成4）年頃の看護系大学の急激な増加と時を同じくして、滋賀医科大学においても1994（平成6）年に看護学科、1998（平成10）年には医学系研究科看護学専攻修士課程が設置された。本学は4年制教育のなかで看護師・保健師を育成する大学であり、本学においても5期生の卒業生を送りだすに至った。

臨床や社会の場においても大卒看護職の存在が認知されようとしているが、日本看護協会調査研究報告（1993）によれば看護系大学卒業生の初めての職場での平均勤続年数は2.7年であり長いとはいえない。歴史ある看護系大学卒業生の動向調査（吉田, 岩井, 太田, 押尾, & 堀内, 1984, 1986; 山崎, 藤田, & 宮内, 1993; 菱沼, 小山, 菊田, & 近藤, 1994; 大西, 北村, 久納, 三尾, 西尾, 天野, 他, 1999）は実施されているが、新設看護系大学卒業生の動向調査は始まったばかりであるといえよう。卒業生の社会的活動は大学の特徴を示すものの一つであり、ある意味では教育の成果を示す指標でもある（山崎, 他, 1993）。

1990年代に入って著しく増加した日本の看護系大学において、比較的その初期に開設された本看護学科の卒業生の動向を検討することは、本学の教育を評価し今後の教授内容、方法を再構築していく上できわめて重要である。加えて、卒業生の就業・進学状況とその意識の把握は、看護専門職に対する社会のニーズが多様に変化する今日において、近年新設されたあるいはその途上にある他大学の4年制看護大学の教育活動に何らかの資料を提供し得るものであると考えた。

目的

滋賀医科大学医学部看護学科（以後、本学とする）卒業生の就業・進学状況とその意識を中心とした動向を明らかにする。

調査方法

調査対象

本学卒業生1期生（平成10年3月卒業）から5期生（平成14年3月卒業）の335名。

調査方法

全対象に無記名回答を採用した郵送法による質問紙調査を実施した。

調査内容

これまでの他大学で実施されてきた卒業生実態調査（菱沼, 他, 1994; 市江, 園井, 羽場, 小林, 佐藤, 内海, 他, 2001 a, b; 吉田, 他, 1984, 1986; 山崎, 安達, & 鈴木, 1995）をふまえて、本学の卒業生の実態が明らかになるように検討を重ねながら調査項目を決定した。

1. 対象の背景

年齢、婚姻状況、居住地、免許取得状況について、選択肢および実数の記入による回答を求めた。

2. 就業・進学状況

卒業直後の就業・進学状況、現在の就業・進学状況、5年間の推移について、選択肢による回答を求めた。

3. 就業に対する意識

現在の職場に対する意識（10項目）、仕事をもつことの意味（10項目）、今後の仕事の継続に対する意識について、「そう思う」4点～「そう思わない」1点のように4段階のリッカートスケールで回答を求め、それらを評定値1～4点に得点化した。

4. 大学院進学に対する意識

大学院進学に対する考え（4項目）は選択肢による回答を求め、大学院選択時に重視する点については自由記載で回答を求めた。

分析方法

それぞれの項目において単純集計を行なった。その後、職業に対する意識について卒業年度および職種による差異を明らかにする目的で、 χ^2 二乗検定、

一元配置分散分析を行なった。分析には、統計解析パッケージSPSS Ver.10を使用した。

調査期間

2002年5月8日～30日

倫理的配慮

調査票は返信用封筒と研究の主旨を記載した依頼文を添え送付した。依頼文には、研究への参加は自由であり強制されるものではないこと、データは全体として集計分析するため、個人が特定されないことを明記し、プライバシーの保護に努めた。

結果

対象の背景

回答者数は136名(回収率40.6%)で、卒業年度別回答率は表1の通りである。

表1. 卒業年度別回収率

(n = 136)

卒業年度	期生(人数)	回答人数 (学年の学生数に対する割合)
1997	1(65)	30(46.1)
1998	2(72)	21(29.1)
1999	3(64)	21(32.8)
2000	4(64)	22(34.3)
2001	5(70)	42(60.0)
合計	335	136(40.6)

対象者の年齢は、22歳から32歳まで分布し平均年齢は24.5歳(SD±1.95)であった。婚姻などの状況は、未婚者117名(回答者の87.3%)既婚者17名(12.7%)、子どもがいる者は8名であった。また、現在の居住地は、①滋賀41名(30.6%)、②滋賀を除く近畿55名(41.0%)、③その他38名(28.4%)で全体の7割が近畿圏内であった。

対象者の免許取得状況は、看護師132名(98.5%)、保健師129名(96.3%)、助産師10名(7.5%)、その他13名(9.7%)(養護教諭6名、衛生管理者3名、受胎調節指導員2名、産業看護師、ヘルスケアリーダー、呼吸療法設定資格、音楽教諭など)であった。

就業・進学状況

1. 卒業直後の就業・進学状況

回答の得られた136名から不明者1名を除く135名の卒業直後の進路は、就業した者114名(回答者の84.4%)、進学した者19名(14.1%)、就業・進学ともにしていない者2名(1.5%)であった。就業した者の職種は、看護師77名(卒業直後に就業した者の67.5%)、保健師34名(29.8%)、養護教諭2名(1.8%)、助産師1名(0.9%)であった。卒業年度別の就業・進学状況は表2の通りである。

1) 卒業直後の就業・進学先と選択理由

卒業直後に就業した者114名の卒業直後の就業先は、看護師の場合は300床以上の病院(74名)、保健師の場合は保健センター(21名)が最も多かった(図1)。就業場所の選択理由は図2の通りである。

卒業直後に進学した者19名の進学先は、助産師課程11名(卒業直後に進学した者の57.9%)、大学院7名(36.8%)、その他1名(5.3%)で、助産師課程および大学院が大部分を占めていた。その理由として、助産師課程の選択者は、奨学金を受けていた1名を除いて全員が助産師希望であり、大学院の選択者は、研究に興味があった(2名)、専門性を高めたい(1名)、専門看護師や教員になりたい(1名)、したいことをみつけるため(1名)などであった。

2. 現在の就業・進学状況

調査時点での就業状況は、就業している者118名(回答者の86.8%)、就業していない者18名(13.2%)であった。就業していない者のうち進学している者が13名であった。卒業年度別の就業率は表3の通りである。調査時点で最も就業率が高いのが3期生(95.2%)、一方、就業率が低いのは5期生(78.6%)、1期生(86.7%)であった。

1) 現在の就業・進学先

調査時点で就業している者118名の職種は、看護師69名(調査時点での就業者の58.5%)、保健師36名(30.5%)、助産師9名(7.6%)、養護教諭3名(2.5%)、教育関係1名(0.8%)であった。卒業年度別の就業・進学状況は表2の通りである。卒業直後の就業分野と比べると、看護師が9.0%減少し、助産師が6.8%

表2. 卒業生の就業・進学状況

(n = 135)

年度 (回答人数)	分野	卒業直後人数 (%)	調査時点人数 (%)	卒後から同じ 職場にいる人	今までの進学 状況(人数)
1期生(29)	看護師	12(41.4)	7(24.1)	5	
	保健師	9(31.0)	11(37.9)	8	
	助産師	1(3.4)	5(17.2)	1	
	養護教諭	1(3.4)	2(6.9)	1	専門学校(3)
	その他	0	1(3.4)	-	短大専攻科(1)
	就業者数小計	23(79.3)	26(89.6)		大学院(4)
	進学	6(20.6)	2(6.9)		
未就業・未進学	0	1(3.4)			
2期生(21)	看護師	15(71.4)	13(61.9)	11	
	保健師	6(28.6)	6(28.6)	5	
	助産師	0	0	-	
	養護教諭	0	0	-	専門学校(1)
	就業者数小計	21(100.0)	19(90.4)		
	進学	0	1(4.8)		
	未就業・未進学	0	1(4.8)		
3期生(21)	看護師	8(38.1)	7(33.3)	4	
	保健師	11(52.4)	11(52.4)	10	
	助産師	0	2(9.6)	-	
	養護教諭	0	0	-	短大専攻科(2)
	就業者数小計	19(90.4)	20(95.2)		大学院(1)
	進学	2(9.6)	0		
	未就業・未進学	0	1(4.8)		
4期生(22)	看護師	13(59.1)	13(59.1)	13	
	保健師	5(22.7)	5(22.7)	4	
	助産師	0	2(9.1)	-	専門学校(1)
	養護教諭	0	0	-	短大専攻科(1)
	就業者数小計	18(81.8)	20(90.9)		大学院(1)
	進学	3(13.5)	2(9.1)		その他(1)
	未就業・未進学	1(4.5)	0		
5期生(42)	看護師	29(69.0)	29(69.0)	-	
	保健師	3(7.1)	3(7.1)	-	
	助産師	0	0	-	専門学校(3)
	養護教諭	1(2.4)	1(2.4)	-	短大専攻科(2)
	就業者数小計	33(78.5)	33(78.5)		大学院(2)
	進学	8(19.1)	8(19.1)		その他(1)
	未就業・未進学	1(2.4)	1(2.4)		

(%)は学年の回答人数に占める割合

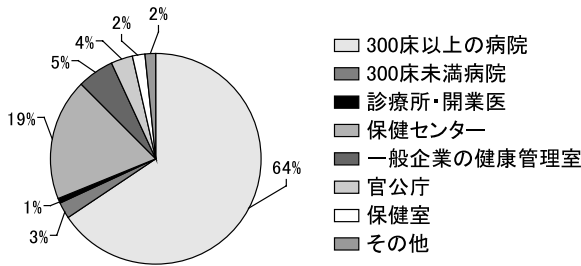


図1 卒業直後の就業先

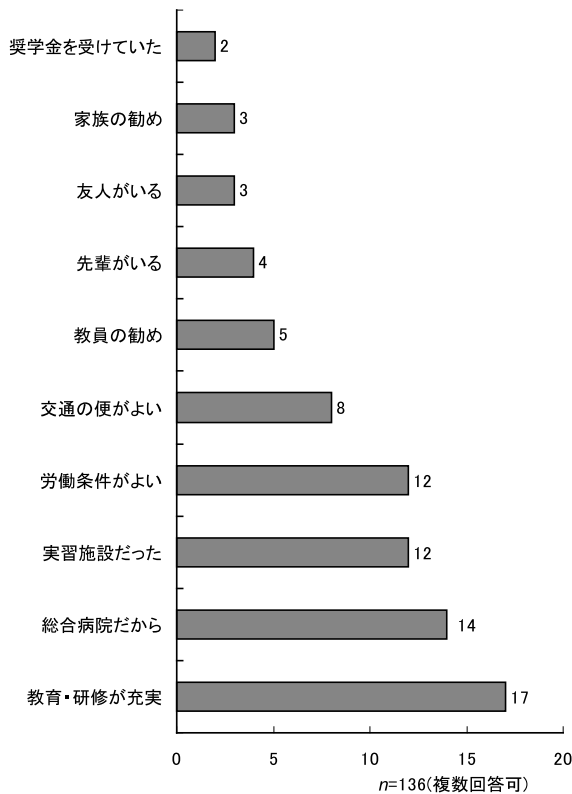


図2 就業場所の選択理由

増加していた。

調査時点で進学している者13名の進学先は、助産師課程6名(専門学校4名、短大専攻科2名)(調査時点の進学者の46.2%)、大学院5名(38.5%)、その他2名(15.4%)で、およそ過半数が助産師課程への進学であった。

2) 現在の職場の所在地

現在の職場の所在地は、①滋賀39名(調査時点での就業者の33.3%)、②滋賀を除く近畿46名(39.3%)、③その他32名(27.4%)で、現在の居住地とほぼ一致した。

3) 現在の勤務形態・勤務体制

現在の勤務形態は、①常勤109名(調査時点での就

表3 卒業年度別就業率

(n = 135)

	回答者数	卒業直後の就業者数 (%)	調査時の就業者数 (%)
1期生	29	23 (76.7)	26 (86.7)
2期生	21	21 (100.0)	19 (90.5)
3期生	21	19 (90.5)	20 (95.2)
4期生	22	18 (81.8)	20 (90.9)
5期生	42	33 (78.6)	33 (78.6)
合計	135	114 (83.8)	118 (86.7)

業者の93.2%)、②非常勤6名(5.1%)で、ほとんどが常勤で勤務していた。また、勤務体制は、①3交替勤務69名(59.5%)、②日勤のみ38名(32.8%)、③2交替勤務6名(5.2%)であった。

4) 現在の職場における就業年数

現職場における就業平均年数±標準偏差は、20.1±17.37ヵ月であった。卒業年度別にみると、1期生38.3±17.54ヵ月、2期生33.9±10.42ヵ月、3期生20.9±8.99ヵ月、4期生12.7±3.78ヵ月、5期生2.0±0.00ヵ月であった。

5) 現在、未就業である理由

調査時点で就業していない者の理由は、①学業に専念するため9名、②育児4名、③結婚2名、④その他4名であった。

3. 5年間の推移

1) 異動状況

5期生を除く卒業直後の全就業者81名のうち卒業直後の職場から異動していない者は62名(76.5%)であった。卒業年度別では、1期生で卒業直後に就業した者23名のうち異動していない者は15名(65.2%)で、以下同様に見てみると2期生では21名のうち16名(76.2%)、3期生では19名のうち14名(73.7%)、4期生では18名のうち17名(94.4%)であった。職種別では、看護師で就業した者48名のうち異動していない者は33名(68.8%)、保健師で就業した者31名のうち異動していない者は27名(87.1%)、助産師・養護教諭は各1名で異動した者はいなかった。

5期生を除いた一度でも就業した経験のある者91名のうち、異動を経験(進学や結婚での離職を含まない職場異動者のみ)したことがある者は16名

(17.6%)であった。卒業年度別では、1期生では就業した経験のある者29名のうち異動したことがある者は8名(27.6%)で、以下同様にしてみると2期生では21名のうち3名(14.3%)、3期生では21名のうち4名(19.0%)、4期生では20名のうち1名(5.0%)であった。異動した回数(進学や結婚での離職による未就業を含まない職場異動)は、2回が2名(いずれも1期生)でそれ以外は1回であった。1回目に異動したときの異動前の就業年数は平均21.7±11.77ヶ月であった。職種別では、異動したときの職種は看護師10名、保健師5名、助産師1名で、職種を変えた者は、看護師から助産師に変更した者2名、看護師から保健師1名であった。異動の理由は、看護師の場合、助産師希望(2名)、仕事内容や人間関係など職場に関する不満(3名)、結婚など理由はさまざまであったが、保健師の場合、ほとんどの理由が結婚であった。

2) 進学状況

調査時点において進学をした経験のある者は、不明者を除く回答者135名のうち25名(18.5%)で、進学先は表2の通りである。進学時期は、卒業直後が19名で8割を占め、臨床経験を経て進学した者は5名であった。その時期と進学先は卒業後5年目に大学院進学2名、4年目に助産師課程進学2名、2年目に助産師課程進学1名であった。

就業に対する意識

1. 現在の職場に対する意識

1) 職場のストレス

調査時点で就業している118名の現在の職場に対するストレスの感じ方は、少し感じている者が53名(45.7%)と最も多く、大変感じている者と合わせると8割と、ストレスを感じている者が多かった。卒業年度別からみた経験年数および職種別による差は認められなかった。

2) 職場の満足度

調査時点で就業している118名の現在の職場の満足度は、「人間関係」3.09±0.84、「仲間ができる」3.06±0.86、「福利厚生」2.80±0.86の項目において評定平均値が高かった。一方、低い項目は、「大学の先輩がいる」2.01±1.19、「勤務時間」2.61±0.96、「職場環境」2.63±0.92であった(表4)。

職場の満足度における経験年数による差は、「人間関係」の項目では経験年数4年以上の者は2~3年の者と比べ評定平均値が有意に高く、「勤務時間」の項目が1年未満の者と比べ有意に高かった。職種別では、保健師は「職場環境」「勤務時間」「福利厚生」の項目が看護師と比べ評定平均値が有意に高かった。看護師が有意に高かったのは「大学の先輩がいる」のみであった。

2. 仕事をもつことの意味

回答者136名を対象にした仕事をもつことの意味は、「自分が成長する」3.74±0.51、「経済的に自立する」3.65±0.58、「新しい知識を得る」3.58±0.59の項目において評定平均値が高かった(表5)。経験年数による差は認められなかったが、職種別では、

表4. 職場の満足度

(n=117)

内 容	平均値(SD)	F 値	経験年数による差	F 値	職種による差
①業務内容	2.78(0.82)	n.s		n.s	
②職場環境	2.63(0.92)	n.s		4.265	看護師<保健師
③人間関係	3.09(0.84)	3.625	2~3年<4年以上	n.s	
④待遇(給与など)	2.66(0.86)	n.s		n.s	
⑤勤務時間	2.61(0.96)	5.216	1年未満<4年以上	17.17	看護師<保健師
⑥福利厚生	2.80(0.86)	n.s		10.783	看護師<保健師
⑦研修	2.70(0.90)	n.s		n.s	
⑧仲間ができる	3.06(0.86)	n.s		n.s	
⑨大学の先輩がいる	2.01(1.19)	3.82	4年以上<1年未満	3.273	保健師<看護師

p < 0.05

保健師は看護師と比べ「家族が望んでいる」「経済的に楽になる」の項目の評定平均値が有意に高く、看護師は保健師よりも「新しい知識を得る」「看護の発展に貢献する」の項目が有意に高かった。

その他の意味として、生活のハリ(3名)、規則的な生活を送ることができる(2名)、生活の基盤(1名)など生活に関連したものや、自己実現(3名)、生きがい(1名)など自身のメンタル面に関連した内容の自由記述があった。

3. 今後の仕事の継続に対する意識

回答者136名を対象にした今後の仕事の継続に対する意識は、就業者の意識では、できるだけ続けたい者が70名(就業者の59.8%)で最も多く、絶対続けたい者が11名(9.4%)と合わせると約7割が仕事の継続を希望し、できるだけ早くやめたい者は6名で就業者の5.1%であった。その他の自由記述では、1~2年あるいは契約任期の終了まで勤務できたらよい(4名)、今の職場はやめても職種としては看護師・保健師として続けたい(3名)、進学したい(2名)、他にやりたいことが見つければやめたい(1名)などの意見であった。経験年数および職種別による差は認められなかった。

一方、未就業者の今後の仕事に対する意識は、状況が変化した時に看護関係のフルタイムで働きたい者が12名(未就業者の66.7%)、看護関係のパートで働きたい者は2名(11.1%)、わからない1名(5.6%)、その他3名(16.7%)で、再度、就業する意思がな

い者はいなかった。その他の自由記述では、夫の勤務地次第で働く、現在の状況が変化したときにパートで働く、再入学した大学の卒業後には医師として働く(各1名)の意見があった。

大学院進学に対する意識

1. 大学院進学に対する考え

大学院修了・在学中を除く回答のあった105名によると、大学院への進学は必要と思っているが今は考えていない者が53名(50.5%)と最も多く、大学院への進学を考えている者は11名(10.5%)、大学院への進学は必要とは思わない者は41名(39.0%)であった。

卒業年度別による進学希望の差は認められなかった。職種別では、看護師の方が保健師よりも大学院進学の必要性はないと答えた者が有意に多かった。

大学院進学の必要性を考えている者、考えていない者それぞれに、その理由を自由記述で回答を求めた結果、大学院進学が必要と思う理由は63名から複数回答が得られた。表6に示す通り、主に①専門性を高めるため、②自分自身の将来のため、③社会と看護との関係、に大別できた。必要がないと思う理由は42名から複数回答が得られ、主に①臨床現場での学びがある(8名)、②研究テーマが曖昧(8名)、③大学院進学の必要性を感じない、興味がない(8名)、④臨床が好き・楽しい(7名)、⑤今は臨床で働くことで精一杯(5名)、⑥臨床と研究のズレ・距

表5. 仕事をもつことの意味

(n = 116)

内 容	平均値(SD)	F 値	職種による差
①家族が望んでいる	3.09(0.92)	6.248	看護師<保健師
②職場の期待に答える	2.71(0.89)	n.s	
③経済的に楽になる	3.54(0.63)	4.325	看護師<保健師
④新しい知識を得る	3.58(0.59)	4.941	保健師<看護師
⑤自分が成長する	3.74(0.51)	n.s	
⑥自律感を得る	3.49(0.67)	n.s	
⑦社会的地位を得る	3.05(0.85)	n.s	
⑧経済的に自立する	3.65(0.58)	n.s	
⑨看護の発展に貢献する	2.44(0.80)	4.833	保健師<看護師
⑩仲間ができる	3.18(0.76)	n.s	

p < 0.05

表6. 大学院進学が必要と思う理由

専門性を高める (50名)
・領域の専門性を高める (14名)
・視野を広げる (9名)
・研究方法を学ぶ (7名)
・よりよい活動のため (7名)
・看護を深める (5名)
・知識を深める (4名)
・スキルアップ (2名)
・臨床での経験をいかす (2名)
自分自身の将来に必要 (9名)
・学歴・キャリアアップのため (3名)
・教育職を考えたときに必要 (3名)
・専門看護師の資格が取りたい (3名)
社会と看護との関係 (6名)
・看護の専門性が問われる時代 (3名)
・看護職の地位向上への一手段 (3名)

(複数回答)

離を感じる (2名) などであった。

2. 大学院選択時に重視する点

大学院選択時に重視する点を自由記述で回答を求めたところ、80名から複数の回答が得られた。大学院選択時に重視する点としては、教官(47名)、学びたいことが学べるか(25名)、カリキュラムに関する点(14名)がウエイトを占めていた(表7)。

大学院を選択するとき、本学修士課程を希望するかを尋ねた。回答のあった64名のうち、希望する者26名(回答者の40.6%)、希望しない者37名(57.8%)であった。希望する者の主たる理由としては、母校であること(11名)が最も多く、希望しない者の主たる理由としては、通学距離の問題(6名)、開設から間がないこと(3名)などであった。

考 察

今後、看護系大学の急激な増加に伴い、ますます増加していくであろう大卒看護職の動向を検討するための基礎資料とするために、本調査で回答の得られた136名(回収率40.6%)の結果を、既存の公的統計資料や他大学の卒業生の動向調査結果を参考にしながら、本学卒業生の就業・進学状況とその意識を

表7. 大学院進学時に重視する点

教官 (47名)
・教授の専門性・研究内容
・教授自身に関すること
・教授陣との関係性
学びたいことが学べるか (25名)
立地条件 (11名)
・働きながら通学可能
・自宅から通学可能
カリキュラム・講義内容 (14名)
・学びたい分野が充実している
・専門看護師に必要なカリキュラム
卒業後の進路 (5名)
・研究が仕事に生かせるか
自分の専門性と一致するか (2名)
自分のテーマと一致するか (1名)
その他
・大学院開設後、数年経過していること
・設備環境が整っていること
・情報の得やすさ
・学費

(複数回答)

検討した。

検討に用いた資料は、1)入手可能な公的資料 - 平成13年度看護関係統計資料集(2001:以後、看護資料集とする)、平成13年度看護白書(2001:以後、看護白書とする)、2)本学と同様に看護師・保健師を養成している看護系大学卒業生の動向調査 - 高知女子大学家政学部看護学科卒業生の動向調査(1993:特別に記載しない限り卒業7年以内を対象にしたものを使用し、以後、K大学資料とする)、藤田保健衛生大学卒業生の就業状況(1999:特別に記載しない限り卒業5年未満を対象にしたものを使用し、以後、F大学資料とする)、3)同時代に開学している看護系短期大学卒業生の動向調査 - 東京都立医療技術短期大学看護学科卒業生の実態調査(1996:以後、T短大資料とする)、日本赤十字愛知短期大学の卒業生の実態調査(2001:以後、N短大資料とする)、である。

1. 就業・進学状況

卒業直後の進路として、就業・進学ともにしていない者は卒業生全体の1.5%(2名)で、看護白書

(3.6%)と比較すると低く、本学卒業生のほとんどが就業・進学していた。特に進学率は14.1%で、看護資料集(8.8%)やF大学資料(進学・その他5.4%)と比較すると高く、本学卒業生の進学志向がわかった。調査時点までで全卒業生の18.5%(25名)が進学を体験していた。そのなかでも5名が看護師の臨床経験を経て大学院や助産師課程へ進学し、それは5期生を除く看護師として就業した者48名の1割にあたり、比較する資料はないものの卒業生の向学志向が伺える。

卒業直後の職種をみると、就業した者のうち看護師として就業した者の割合は7割を占めているが、看護資料集(71.8%)、K大学資料(82.2%)、F大学資料(75.7%)と比較するとやや低い傾向にあった。一方、保健師として就業した者が29.8%とこれらの資料(看護資料集10.5%、K大学16.1%、F大学資料20.7%)と比べると高い割合を占めており、本学卒業生は保健師として働く者が多い傾向にあった。これは、滋賀県における保健師活動が盛んであり、保健師の都道府県人口10万対比が33.7人と全国平均(28.3人)より高い(上位19番目)ことが影響しているのではないかと考えられた。

就業先をみると、卒業直後では医療施設64.0%で最も多く次いで保健センター19.0%と、F大学資料(75.9%、17.4%)と近似していた。

調査時の就業率は、全体の86.8%と高く、そのうち93.2%が常勤であった。これはK大学資料(87.7%)、F大学資料(93.7%)などの就業率と比較するとやや低い傾向がみられるが、進学者の多いことが影響していると考えられた。卒業年度別の就業率は、最も就業率が高いのが3期生(95.2%)であり最も低いのは5期生(78.6%)、1期生(86.7%)であった。これは、日本看護協会調査研究(1993)による初めての職場での平均勤続年数2.7年にみられるように、臨床3年目を迎える3期生前後は離職者が少なく比較的安定しており、1期生の場合は結婚・育児、進学、5期生の場合は助産師課程などへの進学が就業率に影響していると考えられた。

調査時の職種は、就業者全体における看護師の就

業者が卒業直後67.5%であるのに対し58.5%に減少していた。一方、助産師が7.6%に増加し、助産師の就業者はK大学資料(2名1.4%)、F大学資料(4名3.6%)と比べ多く見られていた。保健師の就業者は30.5%で、K大学資料(26.6%)、F大学資料(28.6%)と比べると卒業時より多い傾向にあった。これらのことから、他の看護系大学と比較すると、保健師としての就業が卒業時より継続して多く、助産師課程への進学希望や就業する者が多い特徴がみられた。

5期生を除く卒業生の異動状況をみると、卒業直後から職場を異動していない者は62名で卒業直後に就業した者81名のうち76.5%を占めていた。卒業年度別では、臨床2年目の4期生を除けば6~7割前後の者は異動していなかった。職種別では、看護師68.8%(33名)、保健師87.1%(27名)で保健師が看護師よりも異動していないことがわかる。また、職場の異動を体験した者は17.6%で、卒業年度別でみると1期生27.6%、2期生15.0%、3期生19.0%、4期生5.0%であった。菱沼らの調査(1994)によると、異動が最も多かったのが卒業後3年以上4年未満で全体の54.0%が異動していたが、本学における同時期の1期生(27.6%)、2期生(15.0%)と比較すると、本学でも年数が経つほどに職場の異動者は多くなる傾向にはあるが、本学卒業生の異動は少なく比較的、卒業直後に就業していた職場に在籍している期間が長いといえる。

本学卒業生の職種・職場の変遷をみると、5年間という短い期間ではあるが、本学卒業生は卒業直後より進学および保健師志向が高い。しかしながら他大学と同様に最初は看護師としてスタートし、その後、職場異動や助産師への転職、進学を経験し、自分の目指す方向性を慎重に探っている途中にあるという印象をうけた。また、保健師、養護教諭は現在の職場を大切に成長していきたいと考えている人の割合が高い(山崎,他,1993)といわれるように、本学においても、保健師の異動は結婚や契約期間の理由以外はなく、継続性も長いことから同様のことがいえるのではないかと考えられる。

過去の看護系大学卒業生の動向調査（吉田，他，1984，1986；山崎，他，1993；大西，他，1999）では、就業状況は卒業後4年以上から15年未満で低くなるという報告もあるため、今後も継続して調査する必要があると考えられる。

就業に対する意識

現在の職場へのストレスについては、「大変感じている」と「少し感じている」を合わせると8割近くの卒業生がストレスをもちながらの就業であった。これはN短大資料とも同様の結果である。夜勤がなく仕事の継続がしやすいといわれる保健師と看護師のストレスには有意差はみられなかった。今回は卒業後5年以内を対象としていることから、今後、継続してみていく必要があると思われる。

就業している者の現在の職場に対する総合的な満足度は、評定平均値 2.91 ± 0.71 で満足している傾向にあった。中野らの調査（1992）では、尺度は異なるものの短期大学卒業生の職場に対する満足度は58.7%という結果があり、本学卒業生の満足度が高いともいえる。菱沼らの調査（1994）では、看護大学卒業後6～10年目の者の職場に対する満足度は約60%と低く、本学卒業生も今後、変化していくことが予測される。満足度の高い項目は、「人間関係」「仲間ができる」でN短大資料と同様であった。本学卒業生の場合、これらの人間関係での満足度が総合的な職場満足に影響しているとも考えられる。さらに経験年数でみると、経験年数4年以上の者は「人間関係」の満足度が2～3年の者と、「勤務時間」の満足度が1年未満の者と比べ評定平均値が有意に高かった。中野らの調査（1992）によると経験年数を経るにつれて満足度が上昇していたという報告があることから、経験年数と職場満足が関連するのかもしれないと思われる。職種別では、看護師より保健師の方が「職場環境」「勤務時間」「福利厚生」の満足度が高く、職務内容や夜勤勤務による形態が職場の満足度に影響する一要因ではないかと推測された。

仕事をもつことの意味については、「自分が成長する」「経済的に自立する」の項目で高得点を示し、こ

れは吉田らによる過去の調査（1984）と同様の結果であり、現在においても変化がないことが伺える。各項目の評定平均値を看護師と保健師で比較すると、看護師では「新しい知識を得る」「看護の発展に貢献する」が、保健師では「家族が望んでいる」「経済的に楽になる」の得点が高かった。これらのことは、病院や地域において様々なヘルスニーズをもつ人々と関係性を築きながら仕事をするのが、職業人としてその第一歩を踏み出した卒業生には、自己成長の場として強く意味づいているものと考えられる。しかしながら、卒業後5年目までの段階ではまだルーチンワークをこなすことに精一杯で、看護の発展や職場の期待に応えていこうとする認識がもてないでいると推測される。また、看護師は医療技術の急速な進歩に伴って、日常業務に求められる新しい知識は必要とされることが影響していると考えられる。

就業者の今後の仕事の継続に対する意識は、約7割が今後も仕事継続の意思をもっており、未就業者も状況が変化すれば看護関係の職につきたいとする者がほとんどで、本学卒業生の仕事の継続に対するポジティブな姿勢が伺える。

他大学の調査結果では卒業後4～6年に離職などの変動が多いことから、本学卒業生の職業に対する意識は変化することが予測される。しかしながら、現段階においては、職場へのストレスをもちながらも現状を受け入れており、特に1・2期生はその傾向が強いように思われた。

保健師の職にある者は職場環境や勤務時間などに満足し、仕事をもつことは家族の希望を受入れ、経済的手段として捉えており、看護師の職にある者は新しい知識を得たり、看護に貢献することを仕事のもつ意味として捉えるなど、職種によって職業に対する意識は異なっていた。このような職種による異なりはあるものの、本学卒業生は職業に対してはポジティブに捉え、経済面での必要性を認識し生活の基盤を確保しながらも、対人関係を重視し、そこから自己成長していきたいとする卒業生の姿が伺えた。

大学院進学に対する意識

本学卒業生の大学院進学者は在学中・修了者も含め8名(全体の5.9%)であった。本学では、1998(平成10)年に医学系研究科看護学専攻修士課程が設置されており、大学院は卒業生にとっては比較的身近なものである。

大学院修了・在学中を除く回答者105名によると、大学院の進学は必要とは思っているが今は考えていない者が半数を占め、大学院への進学を考えている者(10.5%)と合わせると、約6割の卒業生が大学院進学の必要性の意識をもっていた。大学院への進学を必要とは思わない4割の卒業生のなかにも、今は臨床で働くことで精一杯と答えた者や研究テーマが曖昧だからと答えた者がみられた。これらのことから、今後、臨床での体験を積み、自分の研究テーマが明確になれば大学院進学を希望する者は増加することが予測される。進学志向、自己成長を求めている本学卒業生のためにも、さらなる大学院の環境整備が望まれる。

卒業年度別による大学院進学希望の有意差は認められなかった。これは、大学院進学希望が臨床経験を積むなかで生まれる場合もあるが、3期生以降は本学大学院の設置に伴い、入学時より大学院生が学内に存在しており、1・2期生よりさらに身近な存在として進路選択肢の一つとして考えることができたことも影響しているように思われる。また、看護師の職にある者は、大学院への進学を必要と思わない傾向にあり、その理由が臨床場面での学びの豊富さと楽しさを述べていた。今後、臨床経験をつむなかで卒業生の意識がどのように変化していくのかを追跡していく必要があると思われる。

大学院進学が必要と思う理由は、主に①専門性を高めるため、②自分自身の将来のため、③社会と看護との関係、に大別できた。卒業生が在学中からも看護の専門性を意識し、卒業後の臨床看護の場面において自分自身の未熟さを感じ、さらなる自己成長のために進学を希望していると思われる。また、自身の将来を見据えた判断をしている姿が伺えた。大学院選択時に重視する点としては、指導教官の専門

性や研究内容、カリキュラム、講義内容など、「学生が学びたいことが学べるか」にウエイトがおかれていた。これらの結果は、澤井、野島、田中、降田、日浦、豊田、らの看護学・保健学系大学院に対する看護職者の需要に関する研究(2002)でも、進学理由はキャリアアップや知識などの再構築などがあり、大学院進学の視点では教官やカリキュラムなどと報告されており、同様の結果であった。

今後、学生が大学院選択を適確に行えるようにするためにも、「本学へ進学すればどのようなことができるか」を学生にわかりやすく示していく必要があると思われる。

結 論

増加している看護系大学の卒業生を送り出す大学側の教育活動を再考していくための基礎資料とするために、滋賀医科大学医学部看護学科卒業生を対象に、就業・進学状況とその意識を中心とした動向調査を実施した。その結果、136名から回答が得られ、以下のことが明らかになった。

1. 就業・進学状況

就業率は86.8%で、その内訳は看護師58.5%、保健師30.5%、助産師7.6%であり、保健師および助産師の就業率が他大学と比較して高かった。卒業直後の進学率においても14.1%と他大学より高く、その6割が助産師課程への進学であった。

2. 就業に対する意識

「仲間ができる」の項目において満足度が高かった。そのなかで4年以上の臨床経験をもつ卒業生は「人間関係」「勤務時間」の項目で満足度が高く、保健師は「職場環境」「勤務時間」「福利厚生」の項目において満足度が高い傾向がみられた。

また、「仕事をもつことの意味は自分が成長する」「経済的に自立する」として捉えており、就業者の7割が仕事の継続の意思をもっており、未就業者の大部分も看護関係への復職を望んでいた。

3. 大学院進学に対する意識

大学院在学中・修了者は約6%であり、6割の卒

業生が大学院進学の実感を感じていた。その理由は「専門性を高める」「自分自身の将来のため」であり、大学院選択の視点は「指導教官」「カリキュラム」「講義内容」であった。

謝 辞

本調査にご協力をいただきました卒業生みなさまに心より感謝します。

文 献

菱沼典子, 小山真理子, 菊田文夫, & 近藤潤子. (1994). 聖路加看護大学卒業より6 - 10年後の就業状況. *聖路加看護大学紀要*, 20, 57-63.

市江和子, 園井葉子, 羽場俊秀, 小林尚司, 佐藤真澄, 内海節子, & 村地俊二 (2001). 日本赤十字愛知短期大学の卒業生の実態調査(その1) 就業状況・職業意識を中心に. *日本赤十字愛知短期大学紀要*, 12, 83-92.

市江和子, 園井葉子, 羽場俊秀, 小林尚司, 佐藤真澄, 内海節子, & 村地俊二 (2001). 日本赤十字愛知短期大学の卒業生の実態調査(その2) 進学・退職理由を中心に. *日本赤十字愛知短期大学紀要*, 12, 93-106.

中野智津子, 黒田公子, 吉田正子, 阿曾洋子, & 松浦佳子. (1992). 本学卒業生の動向(第1報) 職場への適応状況と看護職への定着. *神戸市立看護短期大学紀要*, 11, 101-116.

日本看護協会出版会編集 (2001). *平成13年度 看護関係統計資料集*. 日本看護協会出版会.

日本看護協会出版会編集 (2001). *平成13年度 看護白書 21世紀 看護職の課題, 日本看護協会の方針と活動*. 日本看護協会出版会.

日本看護協会調査研究室. (1993). 看護系大学卒業

者の就業状況調査. *日本看護協会調査研究報告*, 42, 37-91.

岡部聡子, 森下節子, 志自枝康子, 下平唯子, & 神保会里. (1996). 東京都立医療技術短期大学看護学科卒業生の実態調査 第1報. *東京都立医療技術短期大学紀要*, 9, 145-155.

大西文子, 北村真弓, 久納智子, 三尾弘子, 西尾和子, 天野瑞枝, 伊藤小百合, 水野正延, 岡田由香, 皆川敦子, & 北川美紀 (1999). 約30年間の藤田保健衛生大学衛生学部衛生看護学科卒業生の就業状況. *日本看護医療学会雑誌*, 1(1), 19-26.

澤井信江, 野島良子, 田中小百合, 降田真理子, 日浦美保, 豊田久美子, 大町弥生, & 泊 祐子. (2002). 看護学・保健学系大学院に対する看護職者の需要に関する研究(第2報). *日本看護研究学会雑誌*, 25(3), 347.

山崎智子, 藤田佐和, & 宮内美紀子 (1993). 高知女子大学家政学部看護学科卒業生の動向と職業的志向性. *高知女子大学紀要 自然科学編*, 41, 79-88.

山崎裕二, 安達祐子, & 鈴木祐子 (1995). 武蔵野赤十字高等看護学院および日本赤十字武蔵野女子短期大学の卒業生動態調査 (報告1) 就業状況, 進学・研修状況, 転職・退職状況, 職業意識, 等について. *日本赤十字武蔵野女子短期大学紀要*, 8, 113-125.

吉田時子, 岩井郁子, 太田喜久子, 押尾祥子, & 堀内成子. (1984). 聖路加看護大学卒業生動態調査(第1報) 就業状況および職業意識を中心に. *聖路加看護大学紀要*, 9, 11-16.

吉田時子, 岩井郁子, 太田喜久子, 押尾祥子, & 堀内成子. (1986). 聖路加看護大学卒業生動態調査(第2報) 卒業時から現在に至るまでの卒業生の移動状況を中心として. *聖路加看護大学紀要*, 11, 13-21.